唐の太宗

一

李賀は、その詩で幾たびか帝王をとりあげたが、かれが属する唐朝の皇帝を名ざしで歌っているのは、「馬詩二十三首」の第十六の、

唐創新隋公　隋の諸侯　斬りし太宗
拳毛騧太宗　拳毛騧　召させたまひき
興嫌金甲重　金のよろひの　重き　いとひそ
且去捉飛風　つむじ風　とらへ　駆せつけ

（岩波版　2077（唐代の詩篇第5　10721））

だけだ。このことは、賀の太宗への関心の度をはかる一つの目安になる。

では、賀の太宗への関心は、どのような色合を帯びたろう。「馬詩」にその一面があらわれていると考えてよい。従って、この詩の分析が一つの解答をひき出してくれるだろう。

唐の太宗の詩文と賀の詩との間には、ある類似が存在するように思われる。その類似を分析す

ることが、また一つの解答を引き出してくれないだろうか。
このこつをとりあげるにあたって、唐の太宗ないし皇室と李賀の祖先たちとのかかわりかたを、特に顧慮した。拙稿「李神通」「楊伽」「鼻新」などがこの点での参考になるだろう。

二

まず「馬詩」第十六について考える。この詩はわかりにくく、注家の間でも微妙に意見がくいちがう。その違い目が問題になろうと思うので、主だったものを羅列する。

劉辰翁はいう。

語は孫逖ならず。甚だその遇を言う。これ諸孫の語。

はじめの「語は孫逖ならず」は難解だが、孫は石が多い、とか、平でない、というほどの意。逖はちぢむ、とか、こまかい、とかの意で、孫逖とは、根柢のないよいかげんの、というほどの意であろう。従って「語は孫逖ならず」は、思いつきの好い加減なことばではない、ということだろう。続く句は、出会いの大切さについて歌う。作者が皇室の親族の子孫だからこそ吐き得たことばだ、というのであろう。

まったくその通りだが、さて、「出会い」を、よしとするのか、そうでないのか、と突きつめると、この評語では、はっきりしない。語気からすれば、よし、とする方に傾くようだけれども。

呉正子はいう。

唐の太宗、劉黒闥を伐ちしとき、駿馬の拳毛獅子驄と名づくるを育しき。杜詩に「昔日は太宗の拳毛騧」と。○騧は一に飇に作る。

韓の詩にいう「拳毛」が拳毛騧のことである。それが、太宗が劉黒闥を討ったときの乗馬だということは、以後の諸注が踏襲する。ここに引く杜甫の詩は「韋諷録事宅觀曹將軍霜蹄馬図」(10727)である。

呉注に校記が出たついでにいうと、「翎」を宋蜀本・金刊本は「欲」とする。「拳」を王琦注は「卷」とするが誤り。「騧」を宋蜀本は「飇」とし、元刊本と曾益注・王注は「飇」とし、朝鮮本は「飇」とする。飇・飇字は字書にみえず、飇は飄の俗字で、飄はつむじ風である。飇は飄と同じでやはりつむじ風、旋風である。飇・飇は旋をあやまり記したものかと思われる。

曾益はいう。

唐の武德元年、宇文化及は煬帝を江都に弑す。煬帝は位を唐の太宗に禪りき。昭陵の六馬の図は、刺して奉中にあり。その一を拳毛騧という。黄の馬にして黒き喙。劉黒闥を平げしとき乘りしもの。列仙伝にいう。王子喬なるもの、五行に憑しく、能く飄風をおこす。また、況を丸めて馬となし、一日千里と。言うこころは、いやしくも時の用とならば、敢て負いしとこころの重きを嫌わんや。またカをつくしてもって駆馳せんのみと。

隋の恭帝の位を譲りうけたのは唐の高祖であって、太宗ではない。「駟」は「騧」の別字。騧

は口先の黒い黄馬である。つむじ風が玉子にちなむとすれば『列仙伝』を読み直し、その本文が曾注の説くような方向の思考　感情を示すものかどうかを、確めてみる必要がある。李賀はほとんど常に、古典を正確に読み、典拠として引くときには、古典の意を十二分におのれの詩の効果に取りこんでいるからである。玉子の伝については後にのべる。

姚文燮はいう。

高祖の隋を平げしとき、始終、兵柄をもって太宗に属せり。飛風は回風なり。李密、僭号して壇に登る。疾風その衣をうち、ほとんど仆れんとす。またしばしば回風ありて地に発す。のち太宗は鼎を定め、密は誅に伏せり。これ高祖の唐公たりしとき、すなわち兵をもって太宗に属せしは、その勇鋭精勤、ついに大業を成さんことを知りしをいう。祖宗創業の艱、念うべきかな。

詩中のつむじ風を、李密が帝位につこうとした時に吹いた風に見たてているのらしいが、それと詩の馬とどんな関わりがあるのかよくわからぬ。高祖を乗り手、太宗を馬に、たぐえているらしいが、それは無理だろう。

王琦は、『長安志』を引いて、太宗乗用の六馬の石像は昭陵（太宗の墓）の後にあり、刺さった矢を自ら抜いているのが拳毛騧だ、と説明したのちにいう。

詩意を玩（あじわ）うに、拳毛騧は必ず隋の公侯の乗りしところのものならん。その人すでに唐に殺され、その馬は遂に太宗の得るところとなりぬ。事は遠して考うるなしといえども、詩語甚だ

明らかなり。旧解は幽曲に過ぎ、いまだ妥ならず。「嫌う莫れ」とは、旁観者に謂いて、「この馬の金の甲の体につきありて行走するに艱からんを嫌うなかれ、且つその去きて飄風を逐いて軽捷なること故のごときを見よ」というなり。『説文』に「飄風は回風なり」と。けだし風の回旋して至って疾速なるもの。飄風を捉うとは風を追うの意。

旧解にわかりにくいところがあり、こじつけも混ることは確かだが、王氏のいうほど「詩語甚明」ではない。「嫌う莫れ」を傍観者にむけたことばと見るのは、たぶん王氏の独創である。

方世挙はいう。

挙毛騧によって卓観の時を憶う。天策開府より受禅に至るまで、才を求め道を論ず。正に駿を得て功を成せしがごとし。

鈴木虎雄はいう。

唐の太宗は剣を提げて隋の貴族たちを斬った。それは駿馬挙毛騧を所有してそれに騎ってはたらいたからだ。馬よ、いかに金鉄の鎧が重くとも嫌うな。まあまあはやく飛びだしてつむじ風を捉えるほどに速く駆ることだ。

原文の不分明なところを、不分明なまま正確に訳す、という点で鈴木注はすぐれ、古はその一例といいうるだろう。語釈の「挙毛騧の如き駿馬はよく働くことをいう」に保留をつけたうえでわたしはこの訳に左袒する。

業慈奇の解は、「金甲」の注に『旧唐書』の「王世充の兄の子の琬は竇建徳の軍中に使せしと

き、煬帝が乗りし御馳に乗り、鎧甲はなはだ鮮かにして軍中に来往し、もって衆に誇る」という記事を引くほかは王注と同じで、最後に次のようにいう。

これは良馬が主を得たら重任をおそれないのを借り、後保の人もまた正にこの通り、といっているのだ。

斎藤晌はいう。

唐軍の剣は隋の公侯を斬ったので、その衆馬は唐の太宗の所有に帰し、拳毛騧といわれて名声が高まった。戦場を馳駆するため馬ながら金のよろいを着せられたが、いくら重くても、イヤとはいうな。りっぱな主人を得たのだ。ゆけ、つむじ風に乗って、あっぱれ、手柄をたてよ。

この解はほとんど王注を踏襲し、「嫌う莫れ」の部分は鈴木注に従うもののようである。

陳弘治はいう。

按ずるにこれ上首と同じ意。乃ち長吉、馬を借りて以てその抱負を喻えしなり。

上首というのは「馬詩」第十五である。

「馬詩二十三首」は連作で、その排列構成にも賀の意思が働いているようである。連作中でも隣り合った第十五と第十六を一組のものと見ることは意義がある。（わたしの見るところでは、「馬詩」は二首一組で十一組。第二十三はその総要、楚詩でいえば「乱」わが万葉でいえば反歌にあたるものではないか）

三

「馬詩」第十六についての諸家の解釈は、おのおの違っているが、太宗を英明の天子とし、この一首を李賀の太宗への尊敬・唐室への勤王の情を表明するものと見る点では一致するようである。だが、果して、この一首の目ざすものが、そんなところにあるのだろうか。

注家たちがそのような方向で解釈することに理由がないわけではない。

第一　李賀は、唐朝の官吏である（あるいは、あった）。官吏がその朝廷の天子を名ざしでうたう詩は頌讃以外のものではありえない。

第二　賀は、現に、唐朝讃歌をかなり数多く作っている。（拙稿「頌歌」をみよ）

第三　注家の多数が旧中国の官吏またはそれに準ずる知識人であって、帝王に対する観念は、磁石に対する鉄屑のように一定の方向にしか動けない。知識としてはその制約から自由な判断を下しえても、表現する場合には、詩文の評注といった形式においてであっても、制約の外に出ることはできない。

「馬詩」第十六が、賀の生前に発表されたものならば（たぶんそうであろう）、これを世人が太宗讃歌とうけとることを承知の上で発表したであろう。その限りにおいて、諸家の解釈は、みな正しい。しかしこの詩の表面あるいは深層においても、その表面から人々が受けとったものと同じ方向の思想・感情しか見られないかどうか。

賀が頌歌を作ったのは元和三年、八十八歳以前で、韓事件以後には見かけない。「馬詩」第十六が頌歌だとすると、その作時は、わたしの推測では元和八年、二十三歳、奉礼郎の官を辞する前後だから、唯一の例外ということになる。だがこの詩は、単純な頌歌と見るには都合の悪いパトスがあり、パトスを支える条件がある。

拳毛騧は劉黒闥討伐の時の太宗の乗馬であったとは諸注に一致するところだ。

ところで、劉黒闥討伐といえば、拙稿「李神通」でのべたように、賀の祖先の神通は、武德四年九月、風雪に乗じて進撃したが、途中で風向が逆になり、大敗した。五年の二月から三月にかけて、太宗（当時の秦王世民）は六十日の持久戦ののち劉黒闥に大勝した。しかし黒闥が決定的な打撃をうけたのは、その十二月、太子建成のひきいる軍隊によってであり、黒闥は逃走の途中その部下に執えられ、建成のもとにおくられ、斬られた。斬られたのは武德六年正月だった。

武德九年、天子の位についた太宗は、論功行賞を発表し、不満のあるものはいえと言った。そのことばにつられて不満をのべた神通に対して、太宗は「叔父さんは……劉黒闥が残党を糾合したときは向い風をくって逃げた……」といって一蹴している。

劉黒闥・つむじ風とつづけば、その次に必ず李神通のぼろ敗けと出るであろうほど有名な開国当時の話柄、大鄭王家の恥辱である。この恥辱を暗い背景とし、太子建成らの功績をぬりつぶした上に、輝かしくクローズ・アップされているのが太宗の勝利なのだ。

他の詩人なら話は別である。李神通の子孫の李賀が、いくら天子をたたえるためであっても、

劉黒闥にゆかりのあるものと、つむじ風とをセットにして、うたっただろうか。まだその中で、注家のいうほど素直な感情で「りっぱな主人を得たのだ。ゆけ、つむじ風に乗って手柄をたてよ」と叫びえただろうか。

これが「馬詩」第十六を単純な頌歌とみることに対する第一の難点である。

拳毛騧が、王注のいうように隋の諸侯の乗馬だったとする。すると、この馬は旧主を殺した仇敵に仕えて忠勤をはげんだことになる。太宗によって凌煙閣に肖像を描かれた功臣には、旧主の仇敵である太宗に仕えた者が多い。それだけなら拳毛騧と功臣の対比は間然するところがない。しかし神通は、終始一貫、高祖と太宗とに尽して来た男であり、どうやら旧主をすてて太宗の功臣となった連中を見さげていたらしく、そのシッペイ返しに、かれらの筆になる歴史や記録の中で、こてんこてんにやっつけられることになったのであろう。賀は神通の子孫だ。その賀が素直に単純に凌煙閣の功臣をたたえただろうか。

拳毛騧を斬られた隋公の乗馬とするのは、王琦とその追随者の独断にすぎない。

これが第二の難点である。

神通の子の李孝逸は則天武后に仕えて犬馬の労をいとわず、しかも逆賊の名を蒙って、海南島に流された。その子孫の賀が、さらにまた犬馬の労を鼓吹するだろうか。こういえば「鴈門太守行」1017(2066)の「玉龍を提携して君が為に死せん」を挙げて反駁する向きもあるかもしれぬ。だが、あれは初期の作で、賀の思想は諸事件を境にして大きく変化し、「馬詩」は変化した後の作

なのだ。

これが第三の難点である。

この三つの難点からして「馬詩」第十六を、単純な頌歌と見るわけにはかめことがはっきりした。それならばこの詩の裏面あるいは深層にあるのは何か。この詩をもう一度掘りかえしてみなければならない。それには「馬詩」第十五から検討してゆくのが便宜だろう。

四

不従桓公獵　桓公の獵に従かずば
何能伏虎威　虎くじく機のあらんや
一朝溢麓出　溢川をひとひ出でなば
看取拚雲飛　看よ　雲を拚ひて飛ばむ

2076(20720)

この詩の解としては、王注が最もくわしく、斎藤注がほとんどこれを踏襲するから、ここには斎藤注を引き、必要に応じて他に及ぶことにする。

斉の桓公が獵に出かけられるとき、公の乗馬としてお伴するのでなかったら、虎を懼伏せしめることができなかっただろう。一たん、いぶせき野山の伏せ家から召し出されることがあ

れば、見よ、そのときは雲を払うて飛んでゆくだろう。

・桓公獵　斉の桓公、姓は姜、名は小白。春秋時代の五霸の一つ。管子に「桓公　管仲に問うて曰く、今、寡人馬に乗るに、虎、寡人を望見して敢て行かず。其の故何ぞや。管仲対へて曰く、意ふに君、駿馬に乗りて海桓し、日を迎へて馳せたるか。公曰く、然り。管仲曰く、此れ駿象也。駿は虎豹を食ふ。故に虎疑へるなり」。・溝隴　渓澗山岡の地をいう。馬が溝隴にあるのは、豪傑の士が草野に雌伏しているのにたとえられる。

引用の文は「管子」小問篇にみえ、そのすぐ前に次の文がある。

桓公、位を践み、社に釁し蓋禱らしむ。祝の鬼已疵、肺を献じ、祝って曰く「君の苛疾と、かく虚多く実少きを除わん」と。桓公説ばず、目を瞋らして祝の鬼已疵を視る。祝の鬼已疵酒を授けてこれを祭り曰く「また君のえせ賢ごさにへまことの徳をゝ与えたまえ」と。桓公怒り、まさにこれを誅せんとして、いまだせず。以て管仲に復ぐ。管仲、ここにおいて桓公のもって霸たるべきを知るなり。

さて、「管子」の文によれば、馬のまだらな毛色が虎をおじえさせ、そのおかげで乗り手の桓公が虎の害からのがれたのだ。桓公の威光を借りて虎を懼伏させたのではない。

舜がこの故事を正確に使っているとすれば「馬詩」第十五の素直な読み方としては、次のようになるだろう。

甲　馬がいくら立派だといっても桓公のような権力者の獵の伴をするという機会を与えられ

るのでなければ、虎を屈伏させることはできなかったろう。

乙　そうだろうか。馬にはそれだけの才能がちゃんとあったのだ。桓公に従おうが従うまいが、いったん羈条件から抜け出さえすれば、みよ、雲を払って飛ぶのだ。

方世拳が「虎すらまさに伏すべし。いずくに往くとして逞なるべからざらんや」というのは、右のように解した上での評語ではなかろうか。

もっとも、対話と見ず、斎藤訳のように解しても不都合ではない。そうしてその場合、第一行第二行は、故事とは反対となり、この詩全体が痛烈な反語となる。

第十五の反語の響きは、第十六にも及ぶ。

太宗が隋の諸侯を斬りえたのは、拳毛騧のおかげなのだ。桓公の馬にしても拳毛騧にしても、それほどの能力をもつならば、おのれの運命をいずれの方向にでも自ら定めうるだろう。自らの意思によって権力者に仕えるならば、戦場に引き出され、金甲の重さにも堪えねばならぬ。おまえはそれに堪えるだろう。

だが権力者が野望をとげた後、馬はどうなるか。太宗の本質は何か。祝の鬼已死が看破した桓公のそれとそっくりではないか。かれはいうだろう、おれについていたからこそ、お前にこれだけの働きが出来たのだ。金甲の重さを嫌うな、と。

金甲の重さを嫌わなかったおまえは、背上の主のかわりに矢をうけとめる。主の心は天下に向っていそがしく、おまえの体がうけとめた矢は、お前の口で抜きとらねばならぬ。おまえは人の

手を借ることを欲せず、自らの意思でそれをするだろう。矢は抜けても痛みは残る。その痛みは終身おまえが負わねばならないものだ。

戦場から帰って老い衰えたとき、おまえを待つのは何か。「馬を華山の陽に帰し……天下に服するなきを示す」（尚書・周書・武成）という「聖人」の教えの通り、水草に乏しい野に放って「自生自死」させてくれるであろう（「負薪」参照）

『列仙伝』にいう。

玉子、姓は章、名は震。南郡の人なり。少くして衆経を学ぶ。周の幽王これを徴せども出でず。乃ち歎じて曰く「人、世間に生れ、生を去ること転た遠く、死を去ること転た近し。しかるにただ富貴を貪って性を養うを知らず。命尽き炁（気）絶えて則ち死す。位は王侯となり金玉は山の如きも、形を灰土となすに何の益あらんや。ただ神仙として世を渡り、もって無窮なるべきあるのみ」と。乃ち桑子を師とし……別に一家の法を造り……五行の意に精しく、その微妙を演べて、もって性を養い病を治め、災を消し禍を散じ、能く飄風を起して屋を発き木を折り、雷雨雲霧となし、能く草木瓦石をもって六畜竜虎となす……弟子と行くに各〻泥を丸めて馬となし、これを吹えみな目を開じしむ。須臾にしてみな大馬となる。これに乗り一日に行くこと千里……のち崆峒山に入り、丹を合し、白日昇天す。

巻毛騧よ、おまえも玉子のように権力者のもとを去り、かれの泥馬のように自由に千里をはせ、旋風をまきおこして白日に昇天するほうが、どれだけいいか知れぬではないか。

（五×一三）

「馬詩」第十六を、わたしは右のように読む。白日昇天とは、賀の場合、真の自由の世界に入ることを意味するだろう。そうして、自由の世界に入るためには、権力から遠ざかることが前提だとかれが考えていたろうことは「馬詩」第二十三によっても知られるだろう。

武帝受神仙　神仙を受でし武帝の
煉金得紫煙　錬金術も紫煙得しのみ
廐中皆肉馬　廐には　ただ　肉の馬
不解上青天　青天に上るすべなし

2084 (20728)

五

李賀の太宗に対する感情のねじくれて苦々しいものであったろうことは、ほとんど疑いない。それならば、かれは太宗に対して冷淡、ないし無関心でありえたか、というと、そうではなかったようである。

わたしはかつて唐の歴代の皇帝の詩文をまとめて読んだ。そのとき太宗の詩文に賀の詩と一味通ずるものがあるように感じたが、単なる偶然にすぎないだろうと考え、深く気にとめることはしなかった。

賀の詩を考えてゆくと、どうしてもかれの祖先につきあたる。その祖先と太宗とのかかわりの深さが見えてくると、さきに偶然と考えたあの感触が、別の意味をもってよみがえって来る。よみがえるものはおぞましく、墓場を掘りかえして散乱するのは黄変した骨にきまっている。

きたない骨を取り出して、これが誰それ、という式の研究なるものが、文学の領域にもないわけではない。わたしは、しかし、そんな種類の研究は好きではない。荒廃した皮膚は、かつては小町の肉体の一部であったにしても、剝ぎとるという暴力によって、小町ならぬ世界に組みこまれてしまったので、それは小町ではない。小町の肉体も、深部で支えているのは骨であるに違いないが、骨なんぞどこにもないとしか思えないのが小町の肉体なのだ。ない骨を小町から掘り出して何になろう。李賀の詩から、皮膚を剝ぎとり、骨を掘り起して、何になろう。

だが、また考えてみると、李賀は小町ではない。小町から皮膚を剝ぎとり骨を掘り起し、その皮膚その骨を示してこれを小町だと言いる、暴力の虚妄を、暴露することによって、そこにはない真実の小町を幻出する錬金術師だったように、わたしには感ぜられる。わたしの考えが誤っていないならば、賀は、暴力の幻出する虚妄を逆手にとって、骨も掘り皮膚も剝いだかもしれぬ。かれの方法をさぐるためには、わたしもまた、おぞましい作業を避けるわけにはゆくまい。

六

伍×一五

唐の太宗の「帝宗篇」十首は、長い序文をもち、これを読めば、自ら許した代表作であることがわかる。その第二首。

朝廷での政務をすませ　　嶽廊罷機務
崇文館にしばらく車をとめる　　崇文聊駐輦
ひつぎを開けば神聖な絵図　　玉匣啓龍圖
ひもとくは古代の文章　　金繩披鳳篆
綴じ糸がきれたらつなぎ　　書編斷仍續
書帙をのべてはまた巻く　　繡帙舒還卷
これにむかえばついいつまでも　　對此乃淹留
机によって古典を見ていたくなる　　欲案觀墳典　(00002)

さて、第五句の「書編斷仍續」・斷、あるいは続、を単独に使うことは別に珍らしいことではない・が、二字を組み合せて、斷〇続・または斷続として使うことは、前代の古典にはあまりない・漢の高祖の孫の劉安が編纂した『淮南子』の説山訓に「神蛇は能く斷られて復た続がれども、しかれども人をして斷るなからしむる能わず」というのが、まずは古い例である・唐人が文章の典拠と仰いだ『文選』にも見えぬ・意味の上では似た「将に絶えんとして復た続く」の語が成公綏の「嘯賦」にありはするけれども・

前人の詩文に使用すること稀なこの斷続を、太宗は、「入潼関」(00020)に「寒猿の斷続する声」

ともちい、「喜雪」(00045)に「断続して気まさに沈まんとす」とつかい、「望送魂散葬」(00057)には「哀笳時に断絶す」とうたうのである。

李賀もまた「旁中思」に、

新桂如蛾眉　眉のごとき　桂の新葉
秋風吹小緑　小さき緑　吹く秋の風
行輪出門去　門を出で　車　去り
玉鑾聲断續　鈴の音　響きつ　やみつ
月軒下風露　月かげの軒に　露　おき
暁庭自幽滑　かそけしや　暁の庭
誰能事貞素　むなしきふしど　ひとり守りて
卧聽莎雞泣　つづれさせ　つづる　蟋蟀とや

3160(20804)

とうたい、「有所思」にもまた、

去年陌上歌離曲　去年　まちかどに　別れの曲を　歌ひしが
今日君書遠遊蜀　今日こし君の文にいふ　蜀のくに　遠く旅す　と